

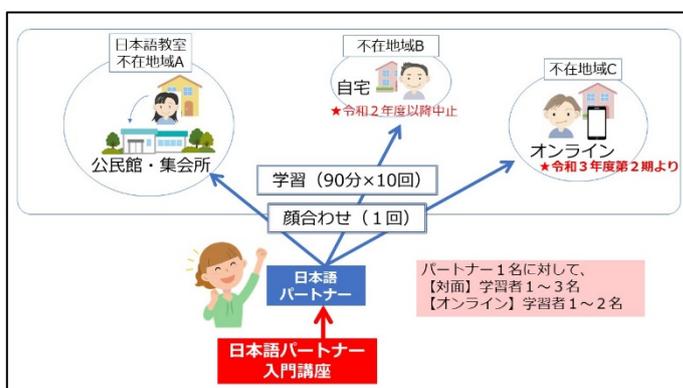
対話を取り入れた「SIC 訪問日本語コース〈オンライン〉」の実践

(公財)しまね国際センター 岩田 和美

1. SIC 訪問日本語コース（地域訪問型）について

島根県では、ボランティアによって 21 の日本語教室が運営されている。しかし、時間と場所が決まっている教室に参加できない外国人住民は多く、それは、2019 年に島根県が行った「外国人住民実態調査」の結果からも明らかである。そこで、島根県と(公財)しまね国際センター(SIC)では、2018 年から「SIC 訪問日本語コース(地域訪問型)」を実施し、日本語を学びたいが、教室に通うことが難しい外国人住民に入門レベルの日本語学習の機会を提供している。

※プログラムの概要



- ・ 募集：1年に3期実施。定員30組/期で、1組は3人まで申し込むことができる。
- ・ 時間・回数：顔合わせ+90分×10回（顔合わせは、学習者、日本語パートナー、コーディネーター(CN)、通訳参加。コースの説明・確認や自己紹介や学習日の決定のサポート等を行う）
- ・ 場所：学習者の自宅・職場もしくは学習者の自宅付近の公共施設（新型コロナウイルス感染症拡大により、2021年より自宅・職場での学習は中止）
- ・ 教材：県オリジナル教材『となりでにほんご』（2021年～、対話によるトピック教材）
- ※ 日本語パートナーに求めること：「日本語を教える」ことではなく、同じ地域に暮らす住民として、外国人住民とやさしい日本語で交流し、外国人住民が日本語で話すきっかけ作りをサポートすること。学習者個人やその人の出身地に関心を持ち、理解しようとする。

2. 課題 次のような理由で、学習希望者を断ることがある。

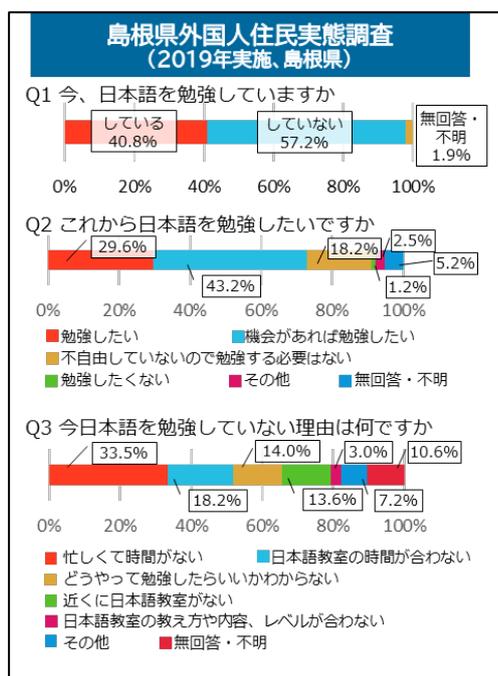
- ・ 登録している日本語パートナーが活動できる曜日や時間、場所に偏りがあるため、学習者とのマッチングができない。
 - ・ 学習場所として使用したい公共施設を休日に使用する場合は、平日の開館時間に鍵を取りに行く必要があるが、仕事でそれができない場合は、学習を行うことができない。
 - ・ 新型コロナウイルス感染症拡大のため、日本語パートナーが外出を控える傾向がある。
- 以上を解決するため、オンライン学習を取り入れることにした。

3. 実践内容（2021年8月～2022年2月）

(1) オンライン対応ができる日本語パートナーの養成

① 『となりでにほんご』オンライン講座

- ・ 対象：オンラインでの活動を希望する日本語パートナー登録者
- ・ 内容：①オンラインでの進め方の説明 ②パートナー同士での練習 ③質疑応答



- ・ 講師：CN、SIC 職員
- ② 大学生のための日本語パートナー入門講座
 - ・ 内容：国際理解・異文化間コミュニケーション、やさしい日本語、オリジナル教材の使い方（一部、Youtube 動画視聴）
 - ・ 講師：広島市日本語教育コーディネーター、CN、SIC 職員

(2) 学習

	2021 年度第 2 期（学習 10～2 月*）	2021 年度第 3 期（学習 11～2 月*）
申込み	31 組	24 組
学習者数	37 人（うちオンライン 19 人）	13 人（うちオンライン 2 人）

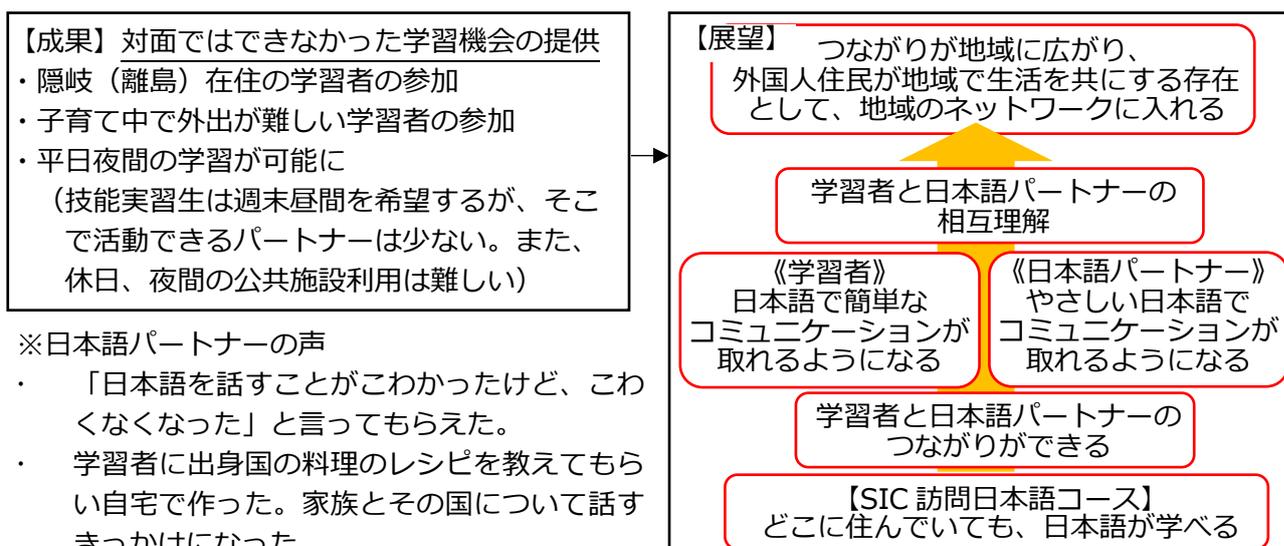
*新型コロナウイルス感染症拡大のため、一部 3 月まで

- ・ 学習者は、1 組 1 名または 2 名
- ・ 対面と同様、オリジナル教材『となりでにほんご』を使用。日本語パートナーには、ホワイトボード、マーカー、絵カード（名刺サイズ）も送付。SIC の WEB ページで教材データも DL 可能。
- ・ 学習開始前にオンラインで顔合わせを実施。
- ・ CN は、毎回の学習後に送られてくる活動報告から学習進捗の確認、パートナーの困りごとに対するアドバイス、数組の学習のモニタリング、スピーチ動画の確認等を行った。



↑顔合わせの様子

4. 成果と展望



※日本語パートナーの声

- ・ 「日本語を話すことがこわかったけど、こわくなくなった」と言ってもらえた。
- ・ 学習者に出身国の料理のレシピを教えてもらい自宅で作った。家族とその国について話すきっかけになった。
- ・ 日本語教室でも活動しているが、毎回違う学習者を担当することが多く、決まった人と 10 回の活動をして関係を深められたことは、とてもよかった。
- ・ コロナ禍でのオンライン学習では、マスクを外して、表情を見て話せたのが対面よりよかった。

5. 所感と今後に向けて

「4 日本語パートナーの声」に加え、学習者からの報告では、日常生活のやり取りを学ぶのに良い機会であり、パートナーと引き続き交流したいという意見が寄せられたことから、オンライン学習には一定の効果があり、ある期間、特定の相手と日本語でコミュニケーションを取ることは、オンラインであったとしても相互理解を進め、信頼を深めるのに十分な機会になると考える。日本語もしくはやさしい日本語でのコミュニケーションに加え、お互いの暮らしや文化を理解した学習者と日本語パートナーが、このコースの目的である「地域とのつながり作り」の輪に加わってくれることを望むが、この期間ではそれを検証することが難しかった。来年度は、SIC が実施する他の多文化共生事業とも連携しながら、引き続きそれを目指していきたい。